

Fate/stay night    Ideal alternative (アイディール・オルタナ  
       ティヴ)

紗代

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

桜ルート以外に士郎が救われるルートってないかなあと思っているままにオリジナルヒロインで書き溜めてたのを投稿します。続きや必要そうな幕間の話は不定期で投稿しようと思っています。

！注意事項！

- ・ オリジナルヒロイン（しかもチート）がいます。
- ・ オリヒロはイリヤの腹違いの妹です。
- ・ 切嗣の正式な奥さんはアイリさんじゃありません。
- ・ 御三家以外にオリジナルの魔術の大家があります。
- ・ 以上を含めて、いろいろ崩壊しています。

これらを 読んで「それでもいいよ！」「そういうの気にしてないから」という方のみどうぞ。

# 目次

プロローグ	1
主人公設定	3
三日目・夜 月下の出会い	5
四日目・朝 状況確認・同盟	7
四日目・朝 <sup>2</sup> 御三家と式波	9
四日目・昼	11
四日目・昼 <sup>2</sup> お使いのご褒美	14
五日目・朝 侵入者	16
五日目・朝 義妹	20
六日目・昼 ボーイミーツガールズ	24
七日目・朝 警告	28
七日目・朝 異変	30
八日目・昼	34
八日目・夜 魔女狩り／蝕むもの	37
九日目・昼 約束と本心	40
九日目・夜 答えの出ない問答	43

## プロローグ

ここはドイツのある貴族が所有する城。

外は雪深く白銀はなおも降り続けている。

「.....」

見慣れた色素のない景色を窓越しに見ながら聖遺物が運ばれてくるのを待つ。今回用意された触媒からするに、過去の四次までの聖杯戦争を顧みても召喚される英霊の格は桁違い。自身もサポートに徹するとはいえ一応魔術師の端くれである以上は知っておくべきだろうと聖遺物の取引や譲渡の一通りを見ていた。

召喚には聖遺物を用いるがそれが呼び出したい英霊が来るかどうかははつきり言って運次第である。伝承ではそう言われていても本当に縁があったのかどうかを知るのは本人と当事者のみ。その聖遺物が呼びたい英霊との縁が薄い場合、最も召喚者と性質の近い英霊が召喚される。まさに賭け。しかし、それは逆に言えばより縁の強い品を用いることが出来れば召喚者との相性関係なしにその英霊を狙えるという事である。

今回の召喚は後者だった。なんせ彼を奉る神殿の支柱となっていた斧剣が触媒だ。儀式が滞りなく進み成功すれば間違いなく最強のサーヴァントが召喚される。しかし問題、というより私にはやや不安があった。それは今回の召喚するクラスが「狂戦士」のクラスだということ。魔力に関しては心配していない。あの子はそんなじよそからの、いやひよつとすると時計塔のロードたち以上の魔力量の持ち主だから。けれど、意思疎通が叶わないのであればマスターである彼女を守ってくれるとは限らない。そこだけが不安の種だった。「狂化」による様々なデメリットであればいくらでもフォローのしようはある。けれども、白く無垢で小さい親友<sup>あね</sup>を果たして彼は守ってくれるのだろうか。

そんな風に一人考え込んでいると後ろの扉から控えめなノックの音が聞こえた。

「どうぞ」

「刹那様、聖遺物がたった今所定の位置に着いたとの連絡がありました！至急お嬢様のおられる聖堂までお越しください！」

「そう、ありがとう。今行くわ」

あの子と同じカラーリングの、この城の城主自らが造り出したホームクルスの使用人に促されて部屋を出る。

前回の聖杯戦争から10年。あれから10年経ったのだ。今度こそ、成功させなくてはならない。たとえこの身がどうなるうとも構わない。最高のマスターに最強のサーヴァント、そして魔術師殺したる私。駒の準備はほぼできた、私はあの子を守りながら自分に課せられた使命を果たす。

「待っていてくださいいね、お父様。必ずやあなたを——」

「殺しますから」囁いたその声は誰に聞かれることもなく、ただ石造りの冷たい廊下に滲みこんでいった。

## 主人公設定

式波 刹那（16）

・ 長い黒髪と紫の瞳をした絶世の美少女。

・ 式波家12代目当主。

・ 二代目魔術師殺し。

・ 魔術回路は普段使用するもので60本、全てあわせると数えきれない。また、全身の神経全てが回路であり、普通の魔術師のようにただの回路のものもあるため非常に稀有な存在である。

・ 式波の特性「同調」の性質で魔術の威力を向上させたり、回路への干渉を和らげることが可能でまた、相手に同調することで相手を一時的に操ることも可能。

・ 回路を自力で修復・生成することができるため他人に自分の回路を移植することが可能（というより移植しても影響がない）。

・ 上記の特性により属性や制限は特に無く、自分の思い通りに魔術を行使することができる。

・ 異母姉妹であるイリヤと仲が良く今でも交流がある。

・ 衛宮・式波家の魔術刻印を継承している（衛宮の魔術刻印は別れ際に餞別として切嗣によって移植された）。

・ 母の理想とした「やさしい世界」と父の「正義の味方」から感銘を受け「やさしい世界を作り守る正義の味方」になることを目指す。しかしあることをきっかけに将来の自分を覚ってしまい、以降は自分を「正義の味方」ではなく「成り損ないの出来損ない」というように認識している。

・ 目の良さは父親譲りでまさに鷹の目、狙撃にも長ける。

・ 魔術師だが機械に強い（これも父親譲り）。

・ 救いを信じていない。

プロフィール

12月3日。

AB型。

155cm。

46kg

B89、W56、H78。

家事（特に料理）が得意。

魔術回路：質EX、量EX、編成：正常（異質or特異体質）。

魔術系統：特になし（主に使用するのは式波の錬金術）。

天敵：正義の味方、とそれに準じるもの、言峰綺礼。

好きなもの：銃、家族、イリヤ、効率。

イリヤにとつては妹であり、同時に姉・母親のような存在。

・場合によつては聖杯（大聖杯）になることが可能。

・属にいう「式波の大聖杯」。

・ちなみに元箱入りなためやや世間知らず。

・魔術の知識や常識、教養などは身につけているが、恋愛や性知識などはほとんど知らない（そもそも式波はホムンクルスが作れるうえ、刹那を大聖杯にするつもりだったため跡継ぎのことはまったく視野に入れておらず、その結果刹那は人としての生理的な羞恥を持ちながらも知識を持たない無垢な存在になってしまった）。

・本来なら彼女仕様の「天のドレス」が存在するがアイリスフィールの天のドレスなみに際どく過激なものであるらしく、着ることを絶拒している。それこそ「裸になるかその礼装を着るか」の選択肢しかない場合でもない限り着たくないとのこと。

### 三日目・夜 月下の出会い

教会の帰り道、遠坂と別れ帰ろうとしたときそいつは現れた。

白い幼げな少女とそれに相反するように巨大な巖のような怪物。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと名乗った少女とそのサーヴァント・バーサーカー。ギリシヤ最大の英雄「ヘラクレス」だと言うそいつにはセイバーの攻撃も、遠坂の魔術も効かない。きっと俺はここで殺されてしまう。けど、それでも、傷ついている誰かを見すみす見逃せない。

「セイバー!」

「っ?!シロウ!!」

そう思うが早いか、俺はセイバーを突き飛ばし前へ出た。そこには安全地帯なんてものはなく、死を告げるように振り上げられた斧剣が俺に向かい――。

「――そこまで」

透き通るような激みない高い声と一発の銃声。目を開けるとそこには、黒いコートの少女が一人佇んでいた。遠坂よりも長い黒髪をポニーテールに結び上げやや大きめにも見える黒いコートを着込んでおり、靴も、彼女の装身具すべてが黒。それが彼女の恐ろしく整った白い顔を引き立てる。

俺の足元には一発の弾丸がアスファルトに深々とめり込んでおり、おそらく彼女の手に持つ銃からのものであろうことが分かった。

「――っ」

一瞬、彼女と視線が交わった。何の感情も含まれない眼差しはすぐに逸らされてしまったが、俺は月明かりに照らされる彼女の美しさに見惚れ、視線を逸らされてもずっと彼女から目を逸らせずにいた。

「ごめんね、セツナ。お兄ちゃん殺しちゃうところだったわ」

「いいよ、イリヤ。電話に出てくれないからもしかすると思って思ってたし。――それにまさかサーヴァントを庇うような奇特なマスターがいたことにも驚いたしね」

「あ」と白い少女は思い出したように呟き、コートのポケットを探って



携帯を出して確認すると「ごめんなさい……」と反省したようにセツナと呼んだ彼女に謝罪した。そして彼女が怒っていない事を覚ると元の調子で俺たちに視線を戻す。

「……そうね、紹介するわ。じゃないとフェアじゃないだろうし。セツナ！いい？」

「……だめって言ってもどうせいつか知られるだろうし、いいよ」  
「ありがとう！じゃあセツナ、お願い！」

ため息でも吐きそうな雰囲気をした彼女は肩をすくめながらも俺たちの方に向き直り、その重たい口を開いた。

「私は式波刹那。此度の聖杯戦争ではアインツベルンの協力者——  
——猟犬として遣わされた魔術師殺し」

魔術師殺し、俺たちへ差し向けられたこの戦争には持って来いの魔術師専門おあつちえ向きの刺客。その紹介に凍り付いたのは俺だけではなく遠坂もだった。しかし、遠坂の方が俺より顔色が悪く青白いのを通り越して紙のようになってる。

「魔術師殺し……それも式波って」

そんな俺たちをよそに少女は白い少女の方まで歩いていき、途中合流したバーサーカーもそれについていく。

「イリヤ、今日はもう帰りましょう。夜が明ける前に帰らないと」

「えー、お兄ちゃんともっと遊びたかったんだけどなあ。まあ、いつか。じゃあまたね、お兄ちゃん！リン！」

——次に会うときは殺すから——

白い少女とバーサーカーが俺たちに背を向け歩き出す。そしてその後を付いていくように黒いコートを翻した彼女と再び目が合う。

長い沈黙。彼女の焦点は間違いなく俺に向けられ、どこか憐れんだような憂いているようなそんな目をしていた。それもまた一瞬だけで、そのまま背を向け歩いていく。俺はその背中をただ見つめることしか出来なかった。

## 四日目・朝 状況確認・同盟

朝、目が覚めた。昨日の夜は色々なことが立て続けに起こりすぎて正直あまり寝られなかった。というよりほとんど寝ていない。

「よっ、と」

とにかくずつとこうしているわけにはいかないので早々に支度をして居間に向かう、とそこには――

「あら、起きた？おはよう、衛宮君」

我が学園のアイドル、遠坂凜がいた。

「と、遠坂!?!なんで遠坂がウチに」

と、そこで思い出した。昨日一緒に教会まで行ったこと、その帰りにバーサーカーとバーサーカーのマスターそしてその協力者の魔術師殺しと遭遇して――。思い出すだけで背筋が凍る。

「その様子だと思いい出したよね。まったく、昨日の夜にあんなに危険な目にあつといてそのまま思いい出せないままだったら相当よ。それで、調子は？大丈夫そうならいろいろ話したいことがあるんだけど」

「ああ、大丈夫だ。と、長くなりそうならお茶入れるけど」

「お構いなく、それと一応アーチャーは部屋の外で待機させてるし、あなたに危害加えないことを条件にセイバーにも見張っててもらってるから万が一他のマスターが来ても対処できるようにしてあるわ」

「それはありがたいけど・・・そこまでするほどの話ってなんなんだ？」

「そうね、衛宮君は昨日の夜のこと、どう思う？」

「どう思うって・・・」

昨日の夜。凶悪なまでに強いサーヴァント・バーサーカーと幼くも冷酷なそのマスター。そして、魔術師殺し。彼女の介入がなければ、きつと俺はあの時死んでいた。

「あの怪物、バーサーカーは正直言つて俺一人の手には余る。いくらセイバーが強くてきつと昨日の二の舞だ」

それが正直なところだった。そして遠坂も同じことを思っていたのか頷き話を切り出した。

「私のアーチャーもきつと正攻法では勝てないわ、相手はギリシャ神話最高にして最強の英雄とアインツベルンのマスター、そして魔術師殺し。……アインツベルンは今回の聖杯戦争に相当入れ込んでいようね」

「そこで、提案なのだけれど」と遠坂はそのまま続ける。

「衛宮君、私と同盟を組まない?」

「遠坂と?俺が?」

「そう、あくまでもバーサーカーを倒すまでのものだけだ。あなた、見たところ魔術に関しては知識も技術もせいぜい半人前がいいところだし、そんなんじゃないくらいいいサーヴァントを引き当ててもすぐに殺されるわ。私はアーチャーの傷を治すためにもなるべく消耗したくないし、いざとなったらあなたのセイバーに協力してもらって敵を迎撃すればいい。忙しいから障り程度しか教えられないだろうけどあなたの魔術の修行を見てあげられるわ。———どう?悪くないと思うけれど」

それは願ってもない提案だった。

「俺としては条件が良すぎるくらいだけれど遠坂はそれでいいのか」

「あのね、あくまでバーサーカーがいなくなるまでよ。いなくなったら後は敵同士なんだから私の心配は無用よ。あなたはあなたの心配をすることね、昨日のバーサーカーのマスターみたいに真っ向から狙ってくるようなサーヴァントばかりなわけじゃないじゃない。そういう白兵戦が苦手なキャスターやアサシンみたいな搦め手や策略を使って相手の裏をかくような連中もいること、忘れないでよね」

「ああ、恩に着るよ。遠坂」

そう答えると「ふん」とそっぽを向くように遠坂は腕を組んだ。そして手始めにこの聖杯戦争についての講義が行われ、大体内容を理解し終えたところで講義は終わった。

## 四日目・朝2 御三家と式波

「あ、そうだ。衛宮君、他に何か聞きたいことはある？一応協力関係なんだし私のサーヴァントとか以外の私に答えられることなら答えるけど」

「じゃあ、遠慮なく。昨日の夜、アインツベルンと式波って言われて遠坂なにか言ってただろ、なんなんだ？アインツベルンと式波って聞いた感じだと魔術師の家っぽいけど」

「そういうと遠坂は少し言いよどみ、けれど考えがまとまったのかちゃんと俺に教えてくれた。」

「そうね、士郎もこの戦争に参加している以上は嫌でも聞くことになるでしょうし、隠すようなことでもないから教えましょうか。聖杯戦争の始まりは200年前、ある魔術師の家系3家がそれぞれの思惑から協力したことで始まったの。以降その三家は「御三家」と呼ばれ聖杯戦争の参加権を優先的に配られるようになってるわ。その三家は私の「遠坂」、今はこの地に馴染むために名前を変えてるけど「マキリ」、そして今回のバーサーカーのマスターである「アインツベルン」。」

「そういうことだったのか。だからあんなにも慣れていった。自分にもサーヴァントにも余裕と自信があつたのだ。」

「ちよつと待て、じゃあ式波は？」

「聞いていたところでは「式波」は御三家ではないという、しかし遠坂は名乗ったあの黒い少女にも反応していた。」

「式波は・・・私にもよくわからないのよ。式波はあくまでアインツベルンとしか交流を持ってない。一番最初の儀式の時は立ち会ってたらしいんだけど、その時にしたって記録係、見届け役のようなことしかしていなくて儀式の構造そのものには携わっていなかったようだ。ただ、式波の家そのものは魔術師の家系としては相当古い名家中の名家よ。続いている年数だけというなら私たち御三家を軽く超えるわ。一番長いアインツベルンは千年、式波は少なく見積もっても千五百年以上」

「せんごひやく!?!」

「それだけに謎の多い家であることには変わりないけれど。それにしてもなんでそんなところの子が魔術師殺し……? なにか事情でもあるのかしら」

遠坂の顔が再び険しくなっていく。しかし、考えていても無駄だと悟ったのか話題を切り替えた。

「とにかく、今は少しでも生き残る可能性を上げることが第一ね。私としては士郎の魔術を少しでもまともなものにして、私たちのサーヴァントの回復も同時並行でしながら他の連中に動きがあるまで静観するっていうのが妥当なんじゃないかと思うのだけれど」

「ああ、俺も遠坂に賛成だ。」

「なら決まりね」

こうして方針が決まった俺たちはひとまず解散、ということになった。

## 四日目・昼

もうそろそろ昼時なので気分転換も含め商店街まで買い物に出る。すると、珍しい人影が見えた。

桜だ。

「おーい、桜」

呼びかけるとこちらに気が付いたのか少し急ぎ足で来てくれた。

「こんにちは、先輩」

「ああ、いい天気だな。桜も買い物か？」

にしては手持ちが少ない。それともこれから買いに行くところなのだろうか。

「いいえ、私は新都の方に用があつて、今帰つてきたところなんです。」  
「?」なら桜の家通り過ぎてるだろ、ここ」

確か桜の家である間桐の洋館は商店街より新都をつなぐ大橋に近かつたはずだ。わざわざ商店街に顔を出すくらいなら新都の駅前の方が品揃えも豊富だしそつちで買い物した方が負担が少ない。

「今日は買い出しじゃなくて、ある人へのお礼がしたくて、それで来たんです。」

「お礼?」

「はい。ちよつとよそ見してて危ないところを助けてもらったんです。」

「へえ——なあ、その助けてくれたやつってどんな人なんだ?」

「えと、長い黒髪のすごく美人な女の子です。といつても会つたのはその一度きりでまた会えるか分からないんですけど、せめてお礼だけでも言いたくて」

「黒髪の、女の子」

特徴から遠坂かと思つたが、それならそんなふうに戻りくどく言わずに「遠坂先輩」と言えばいい。なら誰が———と思つた時。脳裏にふと、あの黒い少女が浮かんだ。

いや、ありえないか。

「先輩?」

「ああいや、何でもない。贈る相手が女の子なんじゃ俺は役に立たないだろうし、俺はもう行くよ。桜も帰り道気を付けろよ」

「はい。今うちが立て込んで先輩のおうちに行けませんけど、片付いたらまた行きますから、待っていてくださいね先輩」

「ああ、またな」

そうして桜と別れ買い物に戻る。昼食の材料やお茶請けの和菓子にほうじ茶、あとは広告にあった特売品を買って終了。

「よし、まあこんなもんかな」

セイバーだけでなく遠坂もうちに来るそうなので結構な大所帯になることが懸念される我が家は、念のため多めに食材を買っておいた方がいいだろう。

「つて、卵買うの忘れたな」

いままでは俺、桜、藤ねえの分しか用意しなくてよかったから割と足りていたりしたのだが、如何せんセイバーと遠坂に料理をふるまうのは初めての事なので未知数である。だからなるべく切らさないようにしたいのだが。

「おひとり様1パックか・・・」

買い物に来たのは俺一人のため1パックしか買えない。どうしたものかと思っていると後ろから声がした。

「どうしました?」

聞き覚えのある声に振り返るとそこには、昨日の夜の黒い少女がいた。

「つおまえは、あの時の」

「はい、昨日はイリヤ共々お世話になりました。」

「何しに来た」

「そんなに警戒なさらずとも何もしません。装備の一切は拠点に置いてきましたし、魔眼も使うつもりはありません。それでも納得できないというのであれば、いっそボディチェックしてもいいですよ。」

昨日と同じくほぼ無表情ではあったが、そこに敵意や殺意は一切含まれていないことを感じとり、俺も警戒を解いた。

「それで、どうしたんですか?お困りのようでしたけど」

「そうだ。式波、今暇か？」

「は？確かに予定はありませんけど……」

「よし、ならちよつと手伝ってくれ」

「？」

そして俺は卵のパックを手にとると再び会計にならぶのだった。



## 四日目・昼2 お使いのご褒美

あれから式波を伴いながら卵以外にもさまざまな品物を買うのに奮闘した俺は、彼女とともに一息つくため公園のベンチに腰掛けた。

「悪いな、付き合わせて。」

「いいえ、このくらいは————それで、戦果は？」

「ああ、おかげで一週間分くらいの買い物ができる」

「そうですか、それはよかった」

「と、そうだ」

さっきの商店街で買った大判焼きの袋を開けた。

「式波はあんことクリームどっちがいい？」

「それじゃあクリームを」

「クリームな、はい」

熱々の大判焼きを物珍しそうにみる式波。

「いい匂い・・・あの、これはなんていう食べ物ですか？」

「大判焼き。さっき味を聞いたときはすんなり答えたのに、知らないのか？」

「クリームは大抵生クリームかカスタードクリームって決まっていますし、あんこより馴染み深いのでいい・・・」

「そっか、熱いから気を付けろよ」

「はい・・・あむ・・・！」

熱々のそれに苦戦しながらも嬉しそうに顔を綻ばせる。なんだかこうしていると小動物を餌付けしてる気分になってくる。

「あ、の・・・」

「ん？」

「そんなに見られると、食べ辛いんですけど・・・なにかしましたか私」  
「え、あ、ああ。悪い、うまそうに食べるなって思って、つい」

小さい口で懸命に咀嚼してるところとか、熱くて小刻みに冷まそうとしてるところとか。こう、いちいち俺のツボをついてくる。

すると式波は恥ずかしそうに俯いた。

「そう、ですか」

「そうそう。そうだ、大事なこと言い忘れてた」

「?なんですか」

「昨日の夜。バーサーカーたちを止めてくれただろ。ありがとう。おかげで命拾いした」

その話題を切り出すとやや表情が硬くなり、緩んでいた空気もどこか張り詰めたものになる。

「・・・敵対者にお礼を言う人には初めて会いました。でも気にしないでください。あの時は作戦も立てないまま出ていったイリヤたちを連れ戻すためにいたに過ぎません。こんな運の良さがいつまでも続くと思わないほうがいいです。イリヤは確実にあなたを殺しに来るでしょうし、他の陣営もそろそろ動いたっておかしくないですから」

「けど俺が言いたいんだ。あの時おまえがいなかったら間違いなく俺は死んでた。だから、ありがとう」

式波はその言葉に一瞬面食らうと少し雰囲気が和らいだ。

「変な人ですね、あなた。・・・そういえば名前聞いてませんでした。」

「衛宮士郎だ。よろしくな、式波」

「はい、よろしくお願いします。」

敵意を感じさせないその笑顔に不意を突かれる。

「っ——」  
「じゃあ、私はこれで、大判焼きありがとうございました。ではまた今度」

そう言つて去っていく式波は、魔術などと無関係の普通の女の子のような足取りだった。

「なんだ、普通に笑えるんじゃないか」

一人残った俺も、セイバーたちの待つ家へ帰るのだった。

## 五日目・朝 侵入者

朝食を終えて各自自由に過ごす。セイバーは道場、遠坂は母屋にて占拠……いやあてがわれた部屋でなにやら作業をしている。俺はというと

「よいせつと」

庭に洗濯物を干していた。シーツとかそういう大きめの物が中心で服とかそういう小物類は別である。天気予報では今日も一日晴れるそうなので、こういった手間と場所を取るものを洗濯するには持つて来いの日である。

「これでラスト」

最後のシーツを干し終わる。と同時に

「衛宮さん」

「どわわ!？」

ここにいるはずのない人物がそこにいた。

「し、式波!?!おま、どうして俺んちに」

「ええと、ちよつとお話したいことがありまして。この場所に関しては衛宮さんの苗字と昨日の消えかけの魔力の残滓をあてにして特定しました。結構苦労しましたが、いってくれてよかったです。頑張ったのでもしいなかつたらどうしようかと思っていました。」

昨日と同じように少し嬉しそうにしながら話す式波を前にとんでもないことを聞いてしまった気がして呆然とする。消えかけの魔力をあてにしたって言ったかこいつ。家の結界も感知してないし……とまあ、そんなことはとりあえず置いておくとして。

「立ち話もなんだし、上がっていけよ」

「え、こつちとしてはありがたいですけど……いいんですか? これでも一応私、敵なのに」

「いいっていいって、家主権限だ」

「……じゃあ遠慮なく」

そういうと式波は玄関のほうまで歩いて行ったので、俺もお茶の支度をしに台所へ向かうのだった。

「それで？どういうことか説明してくれる？衛宮君」

不機嫌そうな遠坂とセイバー。

「話があるっていうから上がったももらったんだ。式波、お茶はほうじ茶でいいか？」

「お気遣いありがとうございます。」

式波は座布団に綺麗に正座し、お茶を置くと俺へ軽く頭を下げる。

「あの確認してもいいですか？衛宮さんはセイバーのマスターで遠坂さんはアーチャーのマスター、でいいんですよね」

「あら、なんで私がアーチャーのマスターであることが確定しているのかしら。まだ姿を現したこともないのに？」

遠坂が警戒半分、挑発半分で式波に問いかける。しかしその睨みは全く効いていないかの如く式波は柔らかい物腰で反証する。

「だって、どうなるか分からない不確定要素の多い戦争のほぼ始まりからサーヴァントを付けずに行動するなんて命知らずな真似、一流の魔術師でもないようなことをしていたでしょう？それがもし作戦だったとしても最初からそれを立てることが重要視されるのは遠距離・中距離・魔術・隠密などの正攻法ではやや難のある性能を持つサーヴァント・・・アーチャー、ライダー、キャスター、アサシンでしょう。あなたは隠し事が続けられるようなタイプには見えませんし、マスターのいろはも知らない衛宮さんと一緒にいる時点で卑怯な不意打ちは嫌いそうですし、キャスターはそもそも魔術の家系としてしっかり成り立っている遠坂が狙って召喚する必要性を感じません。ライダーに関しては火力はあっても基準のステータスがややバランスに欠けていますから。となると消去法でいけば、アーチャーでしょう。クラススキルとして「単独行動」があり、尚且つ狙撃のできそうなサーヴァント、狙撃ができるということはより視野が広いという事。ならマスターから離れて行動することも可能、マスターの危機を察知したらすぐに狙撃するか駆けつけなければならない。いざとなったら呪という手段もあるし、ほら、理に適ってる。——まあ一昨日は何故か現れませんでしたけど」

「っ——」

遠坂が息を？む。いや遠坂だけじゃない、俺もセイバーもその場にいる式波以外の全員が凍り付いた。一昨日の夜の、たった一回の接触だけでここまで分析してしまっている。明らかに自分たちとは格が違う、戦いに慣れた者の分析ほど理に適い当たるものなどない。そう、痛感せずにはいられなかった。

「それで、あなたの用件は何？これが宣戦布告なのだとしたら余程の自信ね、結果が出ないうちからもう勝利したつもりでいるのかしら」「いいえ、ただ用件を伝える前の前提の確認です。衛宮さん、衛宮切嗣という人は知っていますか？」

遠坂の苛立ったような問いに否定で返しつつ式波は俺を真っ直ぐに見つめる。

「ああ。知ってるも何も、俺の親父だ」

「ではその衛宮切嗣はどこに？ここにはあなた方とアーチャーの魔力しか感じ取れませんが」

「親父はもう死んだんだ。5年前に」

「嘘……」

ここにきて初めて、式波は驚いたように目を見開いた。そしてすぐに憂いを含んだ目が伏せられた。

「そう、死んじゃったのね」

ぽつりとこぼされた言葉。無機質なようで、どこか悲しみ交じりの響きを感じさせるそれはここにはいないだれか切嗣に向けられたものだった。

そして目を閉じ一拍おくと、整理がついたのか、またさつきと同じように真っ直ぐ俺たちを見据える。

「前提も確認し終えましたし、用件を言わなければなりませんね。私のこの聖杯戦争での役割と目的は「イリヤスフィールを守ること」と「衛宮切嗣の抹殺」です」

「親父の、抹殺だって?!」

「衛宮さんの苗字からひよつとしたらと思つて、確信はありませんでしたけど昨日衛宮さんと別れてから調べてみたらここに住んでるっ

てわかったから、一応様子見も含めて今日出向いてきたんです。」

淡々と話す式波にいままで黙っていたセイバーが問いかける。

「セツナ、それはアインツベルンや式波からの依頼ですか？それとも貴女個人のものでしょうか？」

「……」

「答えなさい。少なくともあなたを信用しこの場に通したシロウには説明する義務がある筈だ。」

「どういうことだ？切嗣は魔術師だった。だからどこかしらでアインツベルンか式波の家との関わりがあつたのだとしたら前者の依頼に関しては納得できる。しかし後者の式波個人としてとなると全く思い当たる節がない。」

「……わかりました。ここに通してくれた衛宮さんと、そしてあの人の一番の被害者だったかもしれないあなたに免じて説明します」

観念したように式波は肩をすくめた。

## 五日目・朝 義妹

「まず依頼かどうかですが、正解は式波からの依頼です。衛宮切嗣は前回の聖杯戦争にて必勝を狙う式波とアインツベルンに雇い入れられた傭兵、当時の魔術師殺しでした。マスター適正こそ並でしたが式波はより確実に他の陣営を潰せるようにマスター殺しに特化した彼に取りを持ち掛けたのです。「聖杯戦争に勝った暁には万能の願望器をおまえにやろう。そのかわりマスターとなり戦争に勝利しろ」と。

それまでの彼に何があったのかは、私にもわかりません。でも彼は誰よりも「世界平和」を願う人だった。普通的手段ではその願いが叶わないものであると覚っていた彼はこの機会を逃すまいと承諾し、式波の手引きによってアインツベルンとも手を組みました。

そしてある特殊な聖遺物を用いて最優と言われるセイバー・・・今衛宮さんのサーヴァントになっている彼女を召喚し万全を期して戦争に臨みました。ですが、元々は傭兵。目的のために手段を選ばず効率優先で動こうとする彼は英雄嫌いも相まってセイバーに取り合うこともせずそのまま勝ち残り最後のマスターになりました。

しかし彼は聖杯に何を見たのか結局聖杯を破壊しアインツベルンと式波を裏切ったのです。必勝のために雇い入れた駒が裏切り、アインツベルンや自分たちの内情や秘密を知る者として報復と口封じのために抹殺するよう私へ依頼してきた、ということですよ。」

初めて聞く前回の聖杯戦争と、切嗣の過去。淡々と話す式波とそれを真剣な表情で聞きながら一回も声を上げないセイバーを見る限りそれは事実なのだろうと飲み込む。しかし、まだ腑に落ちないことがある。

「なあ、セイバーはさつき「個人的なもの」って言ってたけど。式波は親父とどんな関係なんだ？」

「シロウ彼女は・・・」

「待って、セイバー。それは自分で言うから」

「・・・そうですね、すみません。出過ぎた真似をしました。」

言いかけたセイバーを式波は穏やかに制する。そしてセイバーも

その意図を汲んだのかこちらも薄く微笑むと姿勢を正した。友人のようなやりとりをする二人。もしかしたら前に召喚されたときに会ってたりしたのだろうか。

「衛宮切嗣は式波の傘下に入った際、ある一人の女性と運命的な出会いをします。その女性の名前は式波永遠（しきなみ とわ）。当時の当主の一人娘で、次期当主を目されていた才媛。出会った二人は惹かれ合い結ばれ、やがて一児を授かります。それが私、式波刹那です。」

驚きのあまり言葉に詰まる。切嗣の実の子。つまり、俺の義理の妹なのだ。

「アインツベルンの方でも衛宮切嗣の生殖細胞とあるホムンクルスの生殖細胞を人工授精させ合いの子を産ませることでより多機能なホムンクルスを生み出します。それがイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。バーサーカーのマスター。あの子も義理の兄妹だったのだ。そして、切嗣は聖杯戦争の後、俺を養子として引き取りそのまま息を引き取った。だからきつと式波たちはずっと二人で、ひよつとしたら一人で生きてきたのだろう。帰ってこない父親を待ちながら。

「私は衛宮切嗣を全面的に許すことはできませんが、切嗣に拾われたあなたを殺すほど憎んでいるわけではありません。イリヤは…狙ってくるかもしれないけど」

穏やかな口調と少し困ったような表情をしつつも意志の強い目でこちらを見る式波。

「私はあくまで「衛宮切嗣の抹殺」を命じられたのであって縁者については何も言われていませんし何も知らない人間を手を掛ける義理はありませんから、衛宮さんのことは聖杯戦争以外では殺しません。もし不安なら自己強制証明の方に書いてもいいです。」

「ギアススクロール…ってなんだ遠坂」

聞き慣れない単語に俺は遠坂の方を見る。と今度は遠坂が目を見開いて驚きを隠せないような表情をしている。そしてそれはセイ



バーもだった。

「裏切りが当たり前の魔術師の世界で、決して違約不可能な取り決めをする時のみ使用される、もつとも容赦のない呪術契約の一つよ。自分の魔術刻印の機能を使って術者本人にかける強制的呪い。例え命をさしだしても、次代に継承された魔術刻印がある限り、死後の魂すらも永遠にとらわれることになる。この誓約書を差し出した上での交渉は、魔術師にとって最大限の譲歩を意味することになるの、だから魔術師の間では滅多に見られない代物なのよ。おいそれと交わしていいものじゃないの」

そんな、本来ならありえない契約をかわそうとしていたのか、式波は。

「いや、誓約書は別にいい。俺は式波の言葉を信じるからな」

「いいのですか、シロウ」

「ああ、それに本当に殺そうと思えば昨日の昼間に商店街で会ったとき、きに殺してる。だろ、式波」

「それはそうですね・・・そうですね、わかりました。衛宮切嗣がないことも分かりましたし、私はこれで失礼します。」

俺に引く気がないと悟ったのか式波は諦めたように肩をすくめ、立ち上がる。

「もう行くのか?」

「はい。こちらもいろいろやらなくてはならないことがあります。ああ、でも安心してください。皆さんに危害を加えるようなものではありませんし、不正のようなこともしてませんから」

「当り前よ。大体あなたのような存在が出てくることそのものが反則みたいなものなんだから」

遠坂がややすね気味にそういうと式波も少し申し訳なきように笑い玄関まで歩いていく。そして俺も見送りのためついていくことにした。

「今日はありがとうございました。それと、夜には敵だという事を忘れなく」

「ああ、お前らを倒さない限り聖杯戦争は終わらないからな。またな、  
刹那」

「え」

式波が動きを止めてこつちを見る。

「なんで、今名前」

「ん、ああ。だつておまえ名乗ってただろ。それにもう家族なんだし、  
駄目か？」

「ううん、そつか、家族か・・・うん。ありがとう、兄さん」

「にいさん？」

「そ、だつて私妹だもの。それともダメ・・・？」

ほつとしたのも束の間。とんでもない切り返しが帰ってきた。ご  
丁寧ややや上目遣いで。こいつ、自分の見た目をわかっているのだろ  
うか。

「い、いや。そんなことは、全然、ない！」

「？そつか、ならよかった・・・じゃあね兄さん。バーサーカーと当た  
るまで絶対に死んじやダメだからね」

まるで何事もなかったかのように自然体。無自覚だった。そして  
そのまま立ち去る刹那を見送り一息つく。

「式波にアインツベルン。魔術師殺しか・・・」

親父が正義のためにしてきたこと。それはおそらく  
争いの火種を徹底的に潰すこと。それは間違いではないしきつと正  
義の味方になるうえで仕方のないことなのだろうと思う。けど、それ  
で残された刹那たちはどんな思いだったのだろうか。少なくとも俺  
は、切嗣と同じことをしている刹那が幸せそうには見えなかった。

## 六日目・昼　ボーイミーツガールズ

やることがないためあてもなくぶらつく。

そしてたどり着いたのは公園だった。と、よく見ると先客がいる。ブランコの上にちよこんと一人で座っているのは――あの時のバーサーカーのマスター、刹那とは対照的な白い少女。たしかイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、だったか。

――  
どうすべきだろうか。仮にバーサーカーを連れてなかったとしても相手はアインツベルンのマスター。昨日の刹那の話からするに只者ではない。殺される可能性も十分にある。なにより一緒についてきた刹那にこちらへの敵意がないとはいえ、あの子もそうだとはい限らない。なんせ刹那と出会ったあの夜、実際に俺は殺されかねない状態にまで追い詰められた。本来なら逃げるべきではあるのだが、そう思考する前に、目が合う。

「あ、お兄ちゃんだ!」

俺に気付くと屈託のない笑顔で駆け寄ってくる。

「こんにちは、お兄ちゃん」

「あ、ああ。こんにちは。えっと、イリヤスフィール」

名前を呼ぶと嬉しそうに顔を綻ばせた。

「覚えててくれたんだ。ありがとう。でも長いからイリヤでいいよ、セツナもそう呼んでるし、そういえばお兄ちゃんの名前聞いてないね」

「俺は衛宮士郎。よろしくな、イリヤ」

「うん!よろしく、えっとエミヤシロ?」

「ちがう。シロウが名前でエミヤが苗字だ」

「シロウ・・・シロウね。覚えてたわ。シロウ、うんいい響き!」

まるで覚えてたの言葉を自慢するように繰り返すイリヤ。しかしこちらとしてはバーサーカーが近くにいるのではないのかと思うと気が気でない。そんな俺の様子に気が付いたのかイリヤは面白くなさそうにこちらを見た。

「今日はバーサーカー連れてきてないよ。シロウだってセイバー連れてきてないんだからおあいこ。」

「連れてきてないって・・・いいのか？刹那はどうしたんだ？」

「だって聖杯戦争は夜でしょ？お日さまが出てるうちは戦っちゃだめなんだよ、セツナは一緒に来たんだけど、撒いてきちゃった」

笑顔でとんでもないことを言うイリヤに内心頭を抱えた。俺もついさっきまで危機感を感じていたが刹那はその比ではないだろう。気づいたら聖杯戦争が終わってしまいましたなんて家から正式に送り出された刹那にとっては卒倒ものである。

「ね、シロウ。時間があるならお話ししましょう。シロウと話すのたのしみにしてたんだから」

「ああ、けど刹那はいいのか？」

「セツナなら大丈夫よ、ちゃんと見つけてくれるわ。ほら、ちょうど空いてるし、座りましょう」

促されるままに近くのベンチに腰掛ける。なんの警戒もなく俺の隣に座るイリヤ。いや、現時点で最強のマスターであるこの子に警戒すべきなのは俺の方なのだが、いくら魔術師だからといってもこんな小さい子の手を振りほどく勇氣はなかった。事情を知らなければそうしたかもしれないが、刹那からあらかじめ事情を聞いている身としてはそんな氣は起きなかった。

「そういうえばシロウはあの子、刹那に会った？」

「ああ、一昨日買い物に付き合ってもらって、昨日ウチに来た」

「いいなあ、セツナばっかりずるい。私もシロウとお話したいのに」

「これからたくさん話せばいいだろ、その、家族なんだし」

俺が言いづらそうに言うといリヤはきよとんと呆氣に取られた表情をした。

「それ、セツナから聞いたの？」

「セイバーや俺がウチに上げるに当たっての条件みたいなものでな。全部とまではいかないだろうけど聞いた。アイツの役割と目的、切嗣の過去、俺と刹那とイリヤが血の繋がらない家族だということ。」

「そう・・・でも、でもいいよ。シロウの氣にすることじゃないし、悪

いのは私たちを置いていったキリツグだもの。」

「それに」とイリヤは続ける。

「私のこと「家族」って言うてくれたから、シロウは特別！」

その純粋な笑顔がこの間の酷く照れくさそうにしていた刹那と重なった。

「ねえ、セツナには言うてあげた？」

「ん、ああ。言ったらかなり驚いてたけどな」

「ふーん。でもうれしいな、セツナ以外に家族が増えて。私もセツナもお城ではそれぞれひとりぼっちだったから。なんだか新鮮」

「ほかにだれかいのか？その、母親とか」

「いないよ。私のお母さまもセツナのお母さまももう死んじやってて、お城にいるのはおじい様とホムンクルスの使用人たちだけ。セツナの式波のお城の方もそんな感じなんだって。だからちゃんと血が繋がってて仲良くしてるのは私とセツナだけ。おじい様たちも仲いいみたいだけど、お互いにお城から出ないから」

「それはつまり、お互いに自分の家の中で孤立していたということなのではないのだろうか。」

「キリツグは帰って来なかったけどセツナは帰ってきてくれたの。2年前の、いつもより強めな吹雪だったあの日に。すごく嬉しかった。だから今も夢を見てる気分」

「そっ、か」

「なんだか、イリヤや刹那のことを思うと——と、そこで最近見慣れた黒い人影が目に入った。」

「イリヤ！」

「あ、セツナ。やっときたのね」

「探したよ、もう、いくら魔力の残滓辿れるって言うてもあんなに薄くされてたら誰だって時間かかるって」

「ふんだ。セツナばかりシロウと話した罰よ、ね、お兄ちゃん」

「え、あ、えーっと」

と、そこで俺の存在に初めて気づいたように驚く刹那。

「あれ、兄さん。イリヤと話してたの？もしかしてお邪魔だった？」  
「いいや、別に。ほら、イリヤ。刹那も迎えに来たことだしまた今度  
な」

「むー、約束だよ？」

「ああ、約束だ」

「うん！」

満足したのかイリヤは刹那を急かすように袖を引っ張って遠ざかっ  
かっていき、また、刹那も俺に軽く頭を下げるとそのままイリヤにつ  
いていった。

彼女たちのことを見ていると、このままでいいのかと、ふとそう  
思ってしまう。

正義の味方。決して間違いなんかじゃない。けれど――

その先は、まだ思い浮かばないままだった。

## 七日目・朝 警告

今日は久々に学校に登校しようとして準備を済ませて家を出る。だれもいないいつもの通学路を歩き、交差点に差し掛かる、とそこには刹那がいた。

「おはよう兄さん。今日はどこか行くの？」

「おはよう、刹那。今日は久しぶりに学校に行こうと思ってき、ほら。あんまり休みすぎると進路とかに関わるし」

「行っちゃだめ」

「え？」

最初に会ったときよりも柔らかい雰囲気をした刹那。しかし俺が学校に行くことを伝えると途端に顔色を変えた。

「今日は、ううん・・・しばらくは学校に行かない方がいい。」

「学校に、何かあるのか」

「・・・一昨日あたりから、この冬木一帯に結界が張られてるの。一つは柳洞寺から、もう一つは、たぶん兄さんの通う学校から」

「！」

「柳洞寺の方は薄く広く。けど学校の方は範囲が狭い分濃度は柳洞寺の比じゃない。一度発動すれば取り返しをつかないことになるかもしれない。だから」

「行かないで」と袖を強く引かれる。けど。

「でも、俺が行かなくても他の戦争に関係ない大勢の生徒や教師がいる。遠坂だって今日は登校してるんだ。——ごめんな、刹那」

「そっ、か。そうだね、敵の私に忠告されても素直には聞いてもらえないか。うん」

今にも泣きそうな顔でやりきれなさそうに、まるで自分に言い聞かせるように言う彼女に少しでも安心してもらおうと声をかける。

「大丈夫だ、遠坂もいるしきつと戻って——」

「できるかどうかも分からないような約束なんてしないで！」

ひどく冷たい声に遮られた。刹那の目には感情なんてものはなく、

ただ俺だけを見つめている。

「みんな、みんなそう。賭けみたいな約束をして、私を置いていくの。もうそんなのいらぬ。待つ方の気持ちも知らないで、勝手に死んで、消えて。もう私に期待させないで、守れる保証のない約束なんて最初から取り付けないでよ」

言葉に詰まる。もしかしたらこれが彼女の無表情の根底にあるものの一部、なのだろうか。そう思いながら動けずにいると刹那は何かを取り出して俺の手首に巻いた。それは白いリボンだった。

「それ、あげる。対魔力を上げるのと精神汚染から身を守る効果がある礼装。常時発動型でちよつとした浄化機能もついているから。じゃあ兄さん私はこれで。——ごめんなさい。」

その言葉と共に刹那は俺の腕から手を離した。そしてそのまま俺に背を向けて去っていく。彼女を引き留めようとして伸ばした腕は、彼女に触れることなく空を掴んでそのまま下ろされた。



## 七日目・朝 異変

学校に着いて校内に入る、とすぐ異変に気付いた。建物はなんともない。だが

「なんだ、この感覚……」

身体に感じる違和感。身体がややだるい。なんとなく息苦しく感じる。ここは間違いなく結界の内部だ。校舎の入り口を閉じていなかったのは空気が澱むからだというのは分かる。ただこの結界の用途が分からない。遠坂のように魔術師の見分けがつく奴ならば遠坂や俺を狙って戦いやすい場に作り替える、もしくは空間を囲って閉じ込めるというならわかる。しかし、なんだかこれは少し違う気がした。例えるならそう、狙った獲物を確実に囲いゆつくりと咀嚼していくような、そんなどろりとしたもの。こここの空間、いやひよつとしたらこの校舎全体がまるで

「生き物の腹の中みたいだ」

と、つぶやいたところで足音がする。振り返ると今来たばかりで険しい顔をする遠坂と目が合った。

「衛宮君、これは」

「ああ、間違いなくサーヴァントとマスターの仕業だ」

「そう……この結界、見たところ相当やばい代物よ。何処かにある起点を探し当てて破壊しないと校舎にいる全員の命がないわ」

「俺も今来たばかりだけど気付いた。無関係な人間まで巻き込むなんてな」

「おそろくですけど、この結界の性質からして——」

と、遠坂が説明しようとしていると一気に身体が重くなる。そしてそれとほぼ同時にそばの教室から大きな物音がした。

二人で目配せし急いで教室のドアを開けると、そこに広がる光景に目を見開く。教室にいる人間は全員が倒れ伏しており、そのうえ身じろぐことさえしていない。俺と遠坂は一番近くにいた男子生徒に駆け寄って助け起こす。しかし呼吸も聞こえずただ目が虚ろに開かれ

たままの状態だった。

「・・・ひどいわ。きつとこの結界を張ったやつが結界を発動させたのね。この分だとおそらく他の教室も。人の生命力を吸い上げてつてる・・・まずいわね」

「とにかく今は起点探し、もしくは術者を倒すつていうことでいいのか?」

「そうね、手っ取り早いのは術者を倒して結界維持の魔力を根こそぎ奪うつていうのだけれど、ただここまでの規模でこれほど強力で濃い結界を張れる存在よ。そう簡単にはいかないでしょうね・・・となると起点の破壊が一番かしら。でも起点の場所が——」

「この結界の起点なら、知ってる」

「は?何言つてるの衛宮君。あなたも最近学校休んでたんだから知るわけないでしょうが」

「いいから。ここに入ってきたとき、大体全部理解した」

「何それつて、こころ、待ちなさい!」

俺は遠坂よりも先に教室を出て廊下を歩き階段を上る、そして2階廊下の突き当りには——女がいた。

「おまえ、サーヴァントか」

「——」  
女は何も言わずに鎖の付いた短剣をこちらに投擲する。

「っ!」

それを間一髪で避け、相手の手元に戻る際のこととも考慮して制服の上着を強化する。

「それでも、喰らいなさい!!」

そこへ追いついた遠坂がガンドを放ち、それは女に命中しよろける。が、女は容赦なく俺に短剣を放つ。俺はそいつを避け、短剣に付いた鎖をひつつかんだ。

「なぜ、なぜこの空間でそんな動きが——」

女の理解できないものに対する声色でふと気づいた。なぜ俺はこの空間でこんなにも影響を受けずにいつも通り動けるのだろうか。そして思い出したように手首を見るとそこにはここに来る前に刹那

からもらったりボンがあつた。もしかして、こいつが俺をこの空間から守ってくれているのだろうか。

すると、俺に結界の効果がないことを覚ったのか相手はおもむろに鎖を引き寄せたかと思うとどこにそんな力があるのか俺を引きずり窓に叩きつけた。

「が、つづ、う」

前もって上着を強化していたため衝撃で散らばるガラス片で傷つくことはなかった。しかし相当勢いがあつたのか衝撃を殺しきることが出来ず激痛と吐き気に襲われる。

「衛宮くん！」

「来るな・・・遠、坂」

壁にへたり込んだ俺、そして俺をふっ飛ばしたことで手元に短剣を取り戻した女が近寄ってくる。

だめだ、このままじゃ確実に、殺される。けど衝撃とさっきの当たり所が悪かつたのか動けない。

こんなところで終わるのか、俺は／彼女に従わなかつたくせに。何もできないまま／彼女を失望させて。

——それはできない／彼女の心に触れてさえないのに。

途端に左手の甲が熱くなる。

「来い、セイバー！」

「シロウ！」

女が短剣を振り下ろすもそこにセイバーを呼んだことで短剣が弾かれる。

「逃がすものか！」

「っ！」

女が後退り距離を置くもセイバーはいとも簡単に追いつき剣を振り下ろした。短剣を弾かれ抵抗する術を持たない女はセイバーによつて深手を負い血まみれだった。そしてそんな隙を逃すまいとセイバーは不可視の剣に風を纏わせ——

インレジブル・エア  
「風王結界」

一気に振りぬいた。それにより廊下や教室の窓は強風に耐えられ

ず砕け散り、至る所に切り傷や壊れた校舎の扉などが散乱している。女の方に目をやるともうこれは、見るからに致命傷だった。ただでさえ深手を負っていたのに更に切り傷などで赤く染まった姿は敵ながら痛々しく思える。

「さよなら、サ、ク」

小さく何かを囁くようにして光の粒子になっていく女。その粒子が完全に消えて、結界が解除されたのを感じ取って、やっと俺は肩の力を抜いたのだった。

## 八日目・昼

昼食も終わって俺はある場所に向かった。向かった先は公園。約束もしていないし正直ほぼ賭けに等しいことなのだが、ここ以外に当てがないので仕方ない。公園には遊びまわる子供たちと、そして目当ての人物がいた。

「刹那」

珍しく俺に気が付かなかったのかはつとしたようにこちらを見る。

「兄、さん・・・？」

「ああ。約束、ちゃんと守ったろ」

「じゃあ、学校の結界を解いたのは・・・」

「結界を張ったサーヴァントを倒した。俺と遠坂、その時校内にいなかった外出中の教師以外は少し生命力を吸われて全員病院に搬送されたけど命に別状はないって」

「そっか・・・よかった」

「そうだな。誰も犠牲にならなくてよかった」

「ううん。そうじゃなくて」

「？」

「兄さんが無事でよかった」

あの時のように泣きそうになりながら、けれど嬉しそうに微笑んだ。

「あ、と。そういえばこの前くれた礼装。あれのおかげで助かった。ありがとな」

「サーヴァントが造るような結界に対抗できるかどうかは賭けだったけど、役にたったみたいでよかった」

「本当にお前には救われてばかりだな」

「そうかな？ 私は自分にできることをしてるだけなんだけど・・・兄さんが褒めてくれたからちよつと舞い上がっちゃうかも」

えへへ、と照れる刹那。これは妹とかそういうのでなくても十分可愛いと思える。

「じゃ、これ返すな」

「え、付けててくれないの？」

「まあ俺はもう十分守ってもらったし元の持ち主に返したほうがいい  
と思ってる」

後で遠坂に聞いてみたところ渡されたりリボンは渡される際に言われた効果だけでなく自己治療、治療促進、魔術行使の補助などなどともなく多機能かつ強力な礼装であることが判明し、そのうえ渡されたのがリボンだということから相当大事な愛用品なのではないのかということ（女の魔術師は髪に魔力が溜まりやすいのでいざという時のために髪を伸ばしたり、髪に付ける礼装に気を遣うらしい）で返そうと・・・思ったのだが

「いいんだよ、兄さんが持つてて」

「や、でも・・・」

「いいから、渡すときにあげるって言ったでしょ」

「・・・わかった、じゃありがたくもらっとく」

「うんうん。素直でよろしい！」

有無を言わせぬ眼光を感じて素直に受け取ることにした。遠坂と  
いいイリヤといいこいつといい俺の周りにはそういうやつが多い気がしてならない。悪戯が成功した子供のような憎めない笑顔。・・・  
なんというか、こいつの笑顔とか泣き顔とかに弱いんだよな、俺。いや、最初の無表情でクールなものも捨て難いけど。

「兄さん、まずはサーヴァント一騎の打倒おめでとう。これで残りは六騎。きつと早速脱落者が出たことで色々他の陣営も動かざる負えないことになってるかもしれないね。まあ、だからと言って今回みないなことは二度としてほしくないけど」

「はは・・・」

その言葉に乾いた笑いしか出ない。刹那には悪いがそれはできない。協力してくれているセイバーや遠坂たちに申し訳ないし、なによ  
りこんな無意味な戦いを終わらせるために俺は参加を決めたのだ。それなのに何もなしていない状態で降りるわけにはいかない。

そんな俺を察したのか刹那はやや呆れたように溜息を吐いた。

「そうね、兄さんは一度痛い目を見ても二度も三度も同じようなこと

するんだよね。きつと」

「む、俺だつて失敗から学ぶぞ」

「そうじゃなくて、お人好しすぎるってこと」

「そうか？」

「そう、絶対そう・・・まあ今のところは無事だしいつか」

そう言つて刹那は立ち上がるとイリヤのようにくるりところらに振り返る。

「兄さん。ごめんね、昨日、あんな風に言つて」

「いや、別にいい。結局忠告してくれたのに聞かなかつたのは俺だし、刹那は悪くない」

「・・・ありがとう」

昨日の朝のことは言わない。刹那のあの様子からしてこいつにとつていいものじゃないことは確かだったからだ。だから、俺も立ち上がつて刹那のもとに行き手を握る。

「昨日のこと、言いたくないならそれでもいい。でも一人で何処かに行くのはやめてくれ、イリヤが心配するし、俺も気が気じゃないからな」

「！」

「頼つてくれ、敵とかマスターとかの前に、お前はもう俺の家族なんだから」

「あ、そ、そつか！うん、ありがとう。・・・じゃあ、私。帰るね！またね兄さん」

「？ああ」

そう言つて足早に帰る刹那を見送つてから俺も帰ることにした。と、そういえば

「手、小さかつたな」

いきなり握つてしまったが大丈夫だったのだろうか。刹那の去つた方を見ながらしばらく俺は動けずにいた。

## 八日目・夜 魔女狩り／蝕むもの

全てが寝静まった深夜。それはこの賑わう市街よりやや外れにある山の寺とて同じことだった。いつも通り愛する人と別れ自室に向かおうとしたその時、突如違和感が過ぎった。大切な、大切なあの人と私を繋いでいたか細いラインが、途切れた。普通のサーヴァントならばあまり気付かないであろうそれを感じ取ることができるのもキャスターのクラスで現界した・・・いや、元々魔術をたしなんでいたためなのだろう。

「宗一郎様！」

必死になってさっきの道を引き返す。相手の名前を呼ぶ声が普段なら出さないような大きなものになっているがそんなことになり構っている場合ではない。彼の人は元々魔術師やそれに連なるような家系ではないので知識も経験もなくラインやパスを切ったりしない。つまりラインが切れたということは彼に何かあったということだ。

そうして彼の部屋を訪れ障子を開けると———そこには変わり果てた彼の姿があった。

「あ、あ、宗一郎、さま」

物が少ない彼の部屋の中心を陣取ると同時に彩っていたのは彼の遺体と胸の中心———おそらく心臓を貫かれているのであろうそこから溢れ出た赤い、血、が———それを見た瞬間。手遅れであることを悟る。そしてそれと同時に背後に感じる、殺気。

振り返るとそこには黒い人影。

「ようやく姿を現したなキャスター」

「あなたは中立のはず。何故私のマスターを殺す必要があったのかしら？———答えてくださる？最もどんな答えであつても容赦なんてないけれど」

「何、単純に戦力の補充と聖杯の完成を急ぐための策だ。何せここにはお前を含めサーヴァントが二体もいる。アサシンの元に私のサーヴァントを送った。まあどちらが負けようが聖杯の完成に一步近づ



く。来い、キャスター。マスター亡き今ここにいる理由などなからう」

「ふん、ありますとも。少なくとも私のサーヴァントがここから動けないのだし帰ってくださるかしら。私はマスターがいなくとも結界を張っている以上・・・っ!?!」

その瞬間私の手に激痛が走った。そこは確か令呪のあったところだ。まさか、そしてそれと同時に結界が破られた。それを計算していたかのように男はこちらを見て、言わなくてもいいことを平然と口にした。

「なるほど。決着がついたようだ。最早お前に選択権などないに等しいが、どうする?キャスター」

「・・・っ」

聖杯。あの人を奪った元凶とも言えるそれしかもう私には縫れるものはない。

守りたかった人、ここにいてほしいつけのような理由も剥ぎ取られた私は、力なくうなづくことしかできなかった。

\*\*\*\*\*

「っ・・・」

突如襲い来る魔力の過剰供給による熱っぽさ、それに伴う吐き気や頭痛。いや、「熱っぽい」なんて言葉で片付けられるようなそれではない。これはまるで原子炉の炉心だ。中心から全体に放出される熱は内側から私を崩壊させようとしているかのように熱い。

こんなふうにならないように、イリヤにも繋がらないようにあの子から摘出した聖杯は結界で密閉しているはずだ。なのになぜ膨大な魔力が注がれてくるのか。おそらくこの量からしてサーヴァント。それも二機分。

一つだけ、可能性があるとすれば。きつとあの黒い欠片は未だに動いているのだろう。密閉した結界を通して私に魔力を流し込んでいるのだ。昨日の兄さんが倒したサーヴァントの分は上手く漏らさずに入れたようだったが、さすがにサーヴァントの魔力の量を経験したことがないので色々測り損ねた。それにきつとそれだけではな

い。聖杯の欠片の方にも細工がしてあるのだろう。

「随分と、役割に忠実だな——マキリ」

アインツベルンの聖杯がある以上蛇足としか言えないが。むしろこの場合は役割というよりも儀式の遂行に忠実というところだろうか。

とはいえまだ二機だ。まだ体は動くし、こうして言葉も話せる。思考もちゃんと出来ている。何とかする方法を回らない頭で考えながら過剰反応し始める刻印にも耐えるため身を固くしながらうずくまった。

## 九日目・昼 約束と本心

ひよっとしたらまた刹那に会えるんじゃないかと期待して公園に顔を出すとやはりそこには刹那の姿があった。

「刹那」

「あ、兄さん」

声をかけると刹那から返事が返ってくるがなんとなくいつもより顔色が良くない。それにどこか辛そうだった。

「大丈夫か？顔色悪いぞ」

「ああ、うん。大丈夫、ちよっと城の準備に手こずって寝てないだけだから」

「城の準備？」

「えっと、簡単にいうと城の要塞化、かな」

「城の要塞化って・・・」

「あ、城そのものには色々仕掛ける予定だけど周辺には何もしてないよ。それに今のところは感知式の結界張ったくらいしか出来てないし」

それじゃああの城の周辺にはむやみに近寄れないってことか。いくらイリヤが心配だからと言ってもやり過ぎの域を超えている気がする。

「いくらなんでもやり過ぎじゃないか？」

「戦争が何日かかるか分からないのに自陣を固めずにどうするの。私たち魔術師は本丸取られたらほぼ終わりなんだから」

「・・・それもそうか」

「まあ、前の第四次は結構短期間で終わったらしいけどね。たしか期間は二週間くらいだったかな？やっぱルールブックがちゃんと出来たのと先代の魔術師殺しがいたのが大きいんだろうけど」

「え？その前にルールは出来てなかったのか？」

「ルールっていうか・・・シンプルに殺し合え、ってしかないような状態で聖杯が降臨したはいいいけど皆全滅して優勝者なしとか、第三次なんかは起動してない聖杯が破壊されたりしてまともに機能せずに終

わってるから、そうね。ちゃんとした聖杯戦争が行われたのは四次くらいかも」

「そうだったのか、たしかに今まで優勝者が出てなかったからこうして今も開催してるわけだしな」

「そういうこと。そういえば気付いた？柳洞寺の結界が消えてること」

「え？」

刹那に言われて気を集中させるとたしかに昨日まで張り詰めていた空気はなくなり、柳洞寺の方からの気も禍々しいようなものは一切感じなくなっている。こんなことができるのも刹那の礼装あつてのことなのだが。

「・・・ああ、たしかに。昨日まであつたはずなのにもうなくなってる」  
「普通、こんな物騒なことが起こってるなかで自分の工房を引き払うような魔術師はそうそういないわ。自分に適した霊地であつても急ごしらえな工房なんてたかが知れてるし、それだったらいっそのこと私たちがみたいに守りに徹して籠城するのがセオリー。だからあそこを陣取っていたのはキャスターか、敗退したサーヴァントのマスターっていうことになる。キャスターの場合はクラススキルに「陣地作成」があるから霊地さえあればどこでも工房化できるわけだしね」  
「なるほどな・・・」

「でも、昨日確実に一人減ったよ。キャスターかどうかは分からないけど」

「？なんでそんなことわかるんだ」

「・・・元々聖杯はインツベルンが造り出したものだし、そのインツベルンの協力者として来てるわけだから多少はね」

「なんだか納得できるようなできないような理由だった。しかし、雰囲気はこれ以上聞くなと言っているようにこれ以上聞くことはできそうにもないので、ここはまず話題を変えることにした。」

「なあ、刹那は聖杯を手に入れたら何を願うんだ？」

「マスターはイリヤなんだしきつとインツベルンの宿願かな」

「そうじゃなくて、もしもおまえが聖杯を手に入れたらっていうこと

だよ」

「私の願い・・・？」

刹那は意外そうに目を瞬かせ、少し考えながら話し出した。

「うーん、そうだね。小さい頃の私なら正義の味方になりたいとか、世界平和とか願ってただろうけど・・・今、今かあ・・・」

「わ、悪い。そこまで考え込むようならまた今度に・・・」

「待って、ちゃんとあるから。ただちよつと色々整理してたの。そうね、やっぱり——愛する人と一緒に生きていたい、かな。・・・うう、ちよつと恥ずかしいね、私」

「そんなことない。いい願いじゃないか」

「そ、そう？・・・愛してる人なら恋人とかじゃなくてもいいの。大切な人が私のすぐ傍で幸せな笑顔でいてくれたらそれで」

ほんの少し赤くなりながら微笑む刹那からは最初の時のような張り詰めた雰囲気は全くない。ただそのどこか遠くを見つめる眼差しには羨望と憧れと諦観——色々な感情が込められているように見えた。

「なあ、明日と違って用事あるか？」

「え、特にはないけど・・・どうして？」

「ないなら明日一緒に出掛けないか？」

「・・・いいの？」

「ああ、なんならイリヤも一緒に」

「・・・なら、お言葉に甘えようかな」

ふふ、と笑顔で応える刹那が眩しくて、同時に何処かに消えてしまふような儂さを感じる。敵でありながらもこいつに消えてほしくないと思ってしまうのは、俺のわがままなのだろうか。

そう思うと胸の奥が軋んだ気がした。

## 九日目・夜 答えの出ない問答

遠坂の今日の魔術講座が終わり、日課の鍛錬をするために土蔵に籠る。今日の強化する獲物の鉄パイプを握り、一呼吸置いてから回路を起動する。

「——同調開始」  
トレリスオン

遠坂の教えてくれた切り替えと刹那のくれたリボンのおかげで時間は短縮され、成功率も上がったがそれでもまだ集中を失えば成功率は落ちるし、ひよつとしたらまたやばいことになりかねない。だから集中を切らさないように慎重に魔力を込めていく。構造を解析し鉄パイプ全体に必要な分だけ魔力を流す。

「——成功」

さつきよりも固くなった鉄パイプを見ながら自分の力不足を痛感する。俺にできるのはこいつ<sup>強化</sup>と投影だけ。それも初歩的な強化でこのぎまである。

「見るに堪えんな」

「！アーチャー」

振り返って土蔵の入り口に寄りかかるようにして立つ気に食わない男の声に俺は思わず眉をひそめる。

「何しに来た」

「何、ちよつとした老婆心と確認だ」

「？」

「衛宮士郎、おまえは前提からして間違えている。おまえの本質は使い手でも担い手でもない。おまえは造り出す者だ」

「造り、出す者」

「そうだ、おまえの魔術は強化などではなく投影。空の自分を虚構で埋めそれを現実へ映し出す。故に——おまえの投影には中身がない。それはおまえのイメージが脆弱なものだからだ、どうせイメージするのであれば決して折れない最強の剣をイメージしろ。それだけでもまだマシにはなるだろう」

「悪かったな、シヨボくて」

「ふん、何を分かり切ったことを」

「つおまえな——」

しかし言い返そうと思った言葉は出てこない。まさにぐうの音も出ないほどの確信的に射ている正論である。

「そして確認のほうだが——最近式波の娘と仲がいいらしいな。」

「それが、どうした」

「本来ならば排除するところだが、まあ彼女はイリヤスフィールにさえ手を出さなければそうそう出てくることもないだろう。しかし問題はおまえだ、衛宮士郎」

アーチャーは射貫くような鋭い眼光をこちらに向けてくる。それは目を逸らすことを許さない、俺の動きを止めるには十分な視線だった。

「おまえは彼女のことをどう思っている」

「どうって・・・大切な妹だ」

「それだけか？」

「それだけって・・・」

「聞き方が悪かったか。私が言っているのは彼女がおまえにとってどれほど大切な存在であるかだ」

言われて、考える。刹那は、あいつは俺にとっての家族で妹で守りたい、一番好きで、一番大切な女の子。

しかしアーチャーは俺の答えなど関係ないとばかりに口を開いた。

「おまえは彼女のために理想を捨てられるか？」

「何言ってるんだ、おまえ」

「この先、形はどうあれ必ず彼女はおまえの前に立ちふさがることになる。その時おまえは理想と彼女どちらかを選ばざるおえなくなる。その時おまえはこれまでの理想を捨てて彼女を選べるのか？」

「——」

「彼女を選べないような、そんな覚悟で彼女と関わっているのならもう関わるのをやめろ。そんな者に彼女は救えない。あれは強いがその反面儂く脆い、彼女を想うなら半端に関わるのは逆に彼女を傷つけるだけだ。——では、私はもう行く。この場での答えなど期待して

いないからな」

去り行く背中を見ながら浮かぶのは刹那の笑顔と、あの理想を継いだ寒い月夜のこと。そうだ、刹那は敵で魔術師殺し。聖杯を破壊しようとする俺にとっておそらく一番厄介で絶対に衝突を避けて通ることが出来ない存在。それは理想を追い求めるうえで何としても越えなくてはならない壁になるのだろう。でも刹那の笑顔を思い浮かべるたびに本当にそれでいいのかとこれまで自問自答を重ね続けてこまできたのだ。本来ならおそらく俺は奴の問いに対し「理想」と即答えていただろう。でも今は言い切る自信がなかった。

「怖いのか、俺は」

あいつを失ってしまうことが。

たった数日の出会い。けれどもその数日が俺に多大な影響を与えていることは事実だった。

——『やっぱり——愛する人と一緒に生きていきたい、かな。』

——『大切な人が私のすぐ傍で幸せな笑顔でいてくれたらそれで』

そう言つて微笑んだ彼女が酷く儂げで、寂しそうで、尊くて、綺麗で——何よりも愛しくて。俺の答えは出ないまま、約束の日を迎えることになる。